



イギリス・ウェストミッドランドの産業遺跡

内 藤 博 夫

ウェストミッドランドといえば工業都市バーミンガムを含むイギリスの代表的工業地域として知られてきた地方であるが、1960年代後半からのイギリス経済の低迷の影響をまともに受け、かつての繁栄は失われつつある。政府はウェストミッドランドの一角を占めるシュロップシャー州テルフォードに今世紀末の計画人口15万のニュータウンを建設している。ここに新しい工業を誘致し、ウェストミッドランドの再生をはかろうというものである。テルフォードはバーミンガムの北西50 kmの位置にある人口10.5万の都市で、現在さかんに工業団地の造成が行われている。そこには日本、アメリカなどからの工場進出もみられる。

ウェストミッドランドは鉄と石炭を産出したので産業革命の重要な舞台となり、機械金属工業の中心地となった。シュロップシャー州では1709年に早くもコークスを使った製鉄が行われた。そのためシュロップシャー州は産業革命の揺籃の地と呼ばれている。テルフォードの南部を流れるセヴァン川沿岸は当時の産業活動の様子を伝える遺跡が密に分布している地区の一つである。

写真1は1779年に建設された世界で最初の鉄橋Iron Bridgeをうつしたもので、この橋を渡る者は通行料をとられたという。現在も普通の橋として利用されている。当時のイギリスの製鉄技術および土木建設技術の水準の高さが偲ばれる記念碑的存在である。ちなみにセヴァン川沿岸部にはIron bridge Gorgeという地名がつけられている。写真2はIron Bridgeから東に500mほど離れたところにあるベッドラム製鉄炉(Bedlam Furnaces)で、1757から1758年にかけて建設された、当時の代表的なコークス炉製鉄所の一つであった。これらの施設の多くは鉄鉱石が枯渇したこともあって1830年までに閉鎖され、放棄されていった。ベッドラム炉は1971年に発掘され、保存されるようになったものである。写真3はIron Bridgeより北西1 kmほどのところにある製鉄博物館である。この建物は1838年に铸造品の倉庫として建てられたが、1979年に博物館となった。シュロップシャー州の製鉄業とその歴史に関する物品が展示されている。博物館の庭にはコールブルックデイル製鉄炉(Coalbrookdale Furnaces)がある。これは前述したように1709年にはじめて木炭の代わりにコークスを使って鉄鉱石の製錬を行った記念すべき炉である。規模はベッドラム炉よりも大きく、保存の程度も良かったが、残念ながら夕闇が迫ってきたためカメラにうまくおさめることができなかった。次の機会を期したい。なおイギリスでは環境保護のためのナショナル・トラスト運動がさかんであるが、テルフォードには1968年にIronbridge Gorge Museum Trustが設立され、産業遺跡の保全に当たっている(写真はいずれも1981年6月、内藤撮影)。